

令和6年3月7日

令和5年度練馬区立光が丘さくら幼稚園学校評価報告書

練馬区立光が丘さくら幼稚園

園長 檀原 雅恵

1 自己評価結果

(1)概要

今年度は5月より新型コロナウイルス感染症が5類になったことで、教育活動の展開が4年前に戻るができるようになり、人との関わりが活発になってきた。

保護者への「幼稚園の教育活動に関するアンケート」は全員の方から回答を得る100%の回収率となり、全保護者の意見を集約し考察することができた。このことは、園の教育について保護者の関心が高いことが読み取れ、共に子どもたちを育てる思いを共有していると感じる。

また、1項目以外はどの項目についてもA、Bの肯定的評価が100%であったことは保護者の園への信頼・関心の高さと同側の努力が伝わった結果と受け止めている。「特色ある教育活動」については特にA評価が高かった。「地域の中の幼稚園」への取組として、学校コーディネーターと連携し修了生保護者のボランティアが活躍して、地域とのつながりとして理解を得ることができたことが大きかったと考えられる。園児と保育所、小学校、中学校、高等学校、児童館、デイサービスと地域の公共施設との結びつきも強くなってきたこともつながったと考えられる。

幼稚園に対する様々な温かな自由記述から支援していただいていることが読み取ることができ、改善の視点として参考にしていきたい。

【成果】

○本園の特色ある教育活動として今年度は「多様な人と関わる中で共に育つ教育」「豊かに感じ表現する子供を育む教育」の2つを推進した。「多様な人と関わる中で共に育つ教育」については98.2%がA評価という最も高い数値となった。中学校の職場体験、高校生と遊ぼうデー、小学校への見学・交流、近隣保育所との交流、デイサービスとの交流、みんなともだちの日や親子で遊ぼうデーの地域の方による様々な体験など、地域とのつながりを感じ、教育活動の充実を図り、多様性の中、共生社会を目指していることが評価につながっていると考え。また、「豊かに感じ表現する子供を育む教育」は89%がA評価を選択し、日々の生活の中で直接体験を大事にし、生き物や草花実、野菜などへの興味、関心が広がり、自分から関われるように工夫をし、近隣の公園を活用して遊びや生活をつなげ、表現活動に生かされていることを評価されたと考え。「主体的に遊ぶ姿」を観点に発達に必要な心揺さぶられる直接体験や自然体験できる環境を構成し、多様な人との関わりの中で、幼児期の資質、能力の育成、その中の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点として年齢やその時期に応じた育ちを読み取りながら分析し幼児理解を深め、教師の援助について協議し実践につなげてきた。このことをかわら版、降園時の保護者へのホワイトボードや口頭での連絡、学級保護者会や個人面談での工夫、園だより、さくらトーク(園長と保護者の懇談会の日)等で「見える化」「分かる化」をしてきたことが保護者の理解を得られたと思われる。また、担任が毎日の記録を丁寧に行い、学年全体の担任との話し合いの中で保育を分析し、保育を深く考察する力もついてきた。このことも保育の質の向上につながっている。

○特別な配慮が必要な幼児が多くなり、介助員の人数が年々増加し、担任を含めた全職員体制での対応、幼児一人一人への理解を深め同じ方向に向かい教育活動に臨むことに努力している。今年度は講師を招致する回数や介助員と一緒に研修する機会も増やし専門家のアドバイスを多く受け、教職員のチームとして共有した。また、互いの立場を尊重し信頼関係を土台にきめ細かな援助に努めてきた。

○学校地域連携推進事業の取り組みを通し保育が充実し、様々な地域連携のつながりができたことは成果があった。また、学校支援コーディネーターが地域に出て、幼稚園の教育を丁寧に発信してくれたことも大きな成果であった。

○保護者アンケートの結果で保護者が相談できる対応かについて「あまり思わない」「全く思わない」の回答が昨年まではあったが、今年度は、肯定的評価のみであったことは努力の成果と思われる。

【課題】

○教育目標についての達成目標については全体の評価に比べると B 評価が多い。昨年までのあまり思わない、達成されていないとマイナスの評価がなくなったことに目を向け、更に努力を重ねたい。

○保護者と共に歩む教育活動については、C 評価が昨年に引き続きあった。ご意見を真摯に受け止め、教育活動の意味について発信力の工夫、更なる保育の質の向上を目指していきたい。

【改善策】

○教育目標は本園の基本的な育てたい姿であり、「思いやりのある子ども」は保育の中で友達との関わりを教師がどのように指導援助していくかが鍵になる。教師の質の向上、保護者との連携に努め、保護者が入園あるいは進級当初の幼児の姿と今現在の姿を比べた時に成長を感じていることが見えるように、一人一人の幼児、学級、学年全体での幼児の成長の具体的な姿を幼稚園指導要領、園の教育目標とのつながりを含めて分かりやすく伝える努力をする。

○さくらトークへの参加者がさらに増加するよう工夫していくことを意識し、ICT 等を活用して分かりやすいかわら版や園だよりのドキュメンテーション等も含めて教育活動について意味を具体的に発信することによって幼児の姿を通して教育内容の意味を理解していただき共有できることにつなげたい。また、修了生の保護者とのコミュニケーションにより、長いスパンで幼児の成長を見られる機会を考えていきたい。

○保育の公開、夕方までの園庭開放などができるようになり、保護者同士や教員との距離が近づいたこと、保護者同士のコミュニティが戻ってきたことを感じる。今年度途中から各家庭への区報の配布もあり、昨年度より保健所からの練馬の食育を応援しますなどの他機関からの情報発信を続け、保護者が一人で悩まないよう、保護者同士、教員も含めたコミュニティの場作りを考えていきたい。

根拠となる資料

保護者アンケート集計結果(添付資料1)

2 学校関係者評価

(1) 総括

【成果】

○教育内容

- ・あるがままを認めて育ていけるのはすばらしい。
- ・遊び倒していると、リーダーシップもとれる。
- ・様々な幼児がいる中でも包丁を使ったり、ピーラーを使ったりしっかりと体験を積み重ねている。
- ・運動会では、個の力を発揮するのではなく、多様性を個々の幼児が受け入れていることを感じる協力する競技があり、本園らしくとてもよいと思った
- ・園だよりを毎月拝見し、分かりやすい教育活動の発信を感じる。
- ・よい雰囲気を通りがかりでも感じる。

・学級を合同で学年経営していることが協同性に結び付き、様々な行事でその効果を見ることができた。

・少人数というデメリットがメリットに変えられている。

・自然を取り入れた保育を様々な環境からも感じる。是非来年度も推進してほしい。

○教員について

・若手の先生だが任せられる。やさしい世界が広がっている。全体でみってくれる。

・保育園も交流していることで、幼児も保育士もよい刺激になっている。

○保護者について

・保護者がみんな幼稚園に対して協力的。

・保護者のアンケート 100%の回収率協力体制を感じる。100%満足もすばらしい。エールを送りたい。

・保育内容がのびのびとしているのを感じる。お父さんも、お母さんも園児と楽しんで一緒に遊んでいる姿が微笑ましい。

【課題】

○園児の減少

○保護者や地域の未就園児への教育内容の発信と理解の向上

○若手教員の意欲に向けて

○園児と他校種の子どものつながり

【改善策】

○教育活動について

・様々な人と互惠性のある関わりを考え、幼児一人一人の個性を認め、自己肯定感を感じられる教育を推進する。

・未就園児への働きかけとしてネット発信を効果的に行う。

・園児と他校種の子どもたちとの自然な交流の場を考察。

○保護者への働きかけ

・新しい情報サービス(Sigfy)の活用でいい形での情報発信を構築していく。

・教育内容の「見える化」「分かる化」の発信ををさらに進める。

・在園保護者と共に未就園児の確保へ

○教員について

・地域の他校種や公共施設の教職員とのコミュニケーション、顔の見える関係をしっかりと構築していく。

・若手の教員の意欲向上につながる頑張りへの評価。

(1) 根拠となる資料

学校関係者評価一覧表(添付資料2)

3 評価結果の公表等

・事前に資料を配布し、2月27、29日保護者会にて園長より説明。

・本園ホームページに3月中に概要を掲載。

4 次年度の学校改善に向けた園長の見解

(1) 中期経営目標の実現に向けて

- ① 幼児期の豊かな体験を保障し、「主体的・対話的で深い学び」につなげる幼児教育の実践
- ② 課題の発見と解決に向けて主体的、協動的に教育活動に取り組む喜びを感じる教員の育成
- ③ 区立・地域の幼稚園としての子育ての支援を推進

① 「幼児期の豊かな体験を保障し、「主体的・対話的で深い学び」につなげる幼児教育の実践」

幼児の育みたい資質、能力を視点に幼児理解を深め、教師の援助や環境について共有をしてきた。若手の教員が自ら園内研究により、日々の保育の問題点や知りたいことを出し合い、具体的な保育の場を共有してその場の遊びの読み取りや遊びの中で何を学んでいるのかを具体的に話し合う機会を作り、講師と共に考える機会を積み重ねてきた。来年度さらに幼児の姿を発達に合わせて見取る力を育む。遊びや生活を見守り、適切な援助や環境構成を行い遊びや育ちを育める教師の目を養い、より豊かにしていく。

② 「課題の発見と解決に向けて主体的、協動的に教育活動に取り組む喜びを感じる教員の育成」

チームさくらとして教職員一人一人の資質向上を目指すとともに、協働性、共有を大事にし、幼児教育を中心にチーム力を上げていく。主事や事務等の幼児と少し離れた立場にある職員や預かり保育の教員、介助員と正規の教員と様々な業種の教職員が同じ方向を見て保育を進められるように共通理解を行っていききたい。また、預かり保育時間と定例の保育時間との幼児の生活のつながり、特別な配慮が必要な幼児の保育を通常の保育と共に会計年度任用職員と正規教職員での連携を図り、幼児の生活の縦・横に寄り添うことのできるチームさくらでありたい。また、「働き方改革」を意識し、能率のよい仕事の進め方で公私共々明るく楽しめる教職員が理想である。また、幼児の姿を読み取る力をつけ、保護者へ保育内容と意味が伝えられる工夫をしていく。

③ 「区立・地域の幼稚園としての子育て支援の推進」

就園前の親子の育児相談、子育て情報、コミュニティーの場など居場所になるように推進する。地域に根ざした幼稚園・必要とされている幼稚園になるように具体的に未就園児保育、施設・園庭開放、行事などの充実方法を考えていく。近隣の保育所と連携を取り、幼保小の連携を視野に入れた幅広い子育ての情報を提供し、家庭、地域との連携を推進していく。また、児童館や区民館などと提携し、出前連携も引き続き考えていきたい。保健所との連携によりホームページに食育についての発信を添付、配布や区報の配布など、情報発信をした。来年度も継続し、地域の子育て保護者への支援になるよう工夫したい。

私立こども園との連携では昨年より園数が増え特別支援についての情報交換を定期的に行ったことを踏まえ、来年度もさらに広げていきたい。公立の保育所からの見学の依頼が何件も来て受け入れている。今後も多くの見学があることが予想される。保育者等訪問支援との連携、就学相談、子育ての悩みなど保護者のニーズに寄り添って子育て応援団として関わっていく。

(2) 今後継続して追及していきたい課題

○幼保小連携教育の推進

遊びを通して指導を中心として生きる力の基礎を育むため、幼稚園教育において育みたい資質・能力を押え、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を目指し、小学校と幼児児童間交流、教員間交流、小学校教育との円滑な接続を中心に、今年度作成した「ねりま架け橋期プログラム」を活用し、小学校のスタートカリキュラムと接続し、架け橋期プログラムを推進する。具体的には近隣の小学校(光が丘秋の陽小学校)、保育所(第7、第11、第9保育園)と幼保小連携教育を進めていく。また私立こども園

との連携が増え、顔の見える関係ができた園が増えてきたことを活用していきたい。他の幼児施設、公立私立の保育所ともつながりができたことから、様々な講演会や研修会などにもお誘いし、私立幼稚園・こども園、他の公立私立保育所とも関わりを深め、同じ練馬区内の幼児施設の現場としてのつながりも広め、連携し、情報交換を進め、保育の充実についても深めていきたい。今年度、ねりま架け橋期プログラム作成において本園の見学を受け入れたことも含め、日々保育を様々な幼保小と共有し、接続に向けてつなげていきたい。

○子育て支援教育の充実

保護者の子育て支援のニーズが幼稚園に向けられている。在園の保護者には子育てのヒントや楽しさや一緒に楽しむ機会を作り、地域で子育て支援を推進していく。園だより、ホームページ、さくらトークや保護者会、個人面談などで情報発信していくこと、保護者のコミュニティ作りとしてサークルの推奨やさくらトーク、こあらトークでコミュニケーションの時間の確保など保護者自身の自己有用感を感じられるように考える。未就園児保育の充実をさらに行っていくが、園内だけでなく、地域の乳幼児施設へも保護者サークルと共に出向き、地域の中の幼稚園として子育て支援に力を入れていく。園内、園外の保護者の子育て相談のニーズも高い、様々な需要に応じて対応を工夫していきたい。

○特別支援教育の充実、幼児一人一人の特性に応じた指導の充実

特別な配慮が必要な幼児も他の幼児も幼稚園の生活の中で共に育ち合う共生社会を目指し、一人一人の幼児の特性、多様性を理解し、研修、共通理解を重ね、教職員がチームさくらとしての質の高い保育を実践していけるようにする。同じ幼児施設の見学や研修、区内小学校の支援学級、通級、都立支援学校、などの施設への見学や研修にも積極的に参加し、実際の具体的な姿を把握して、連携や接続を図るための方法を模索していく。関係諸機関と連携しながら、それぞれの立場での意見交換をしながら、保護者支援と共に、幼児理解を深めていく。保護者支援のためのコミュニティの場づくりや連携としての関わり、個別相談も推進していく。外部講師による研修の機会も多くし、教職員が共有できることを考えていきたい。また、障害者施策推進課 事業計画係より声のかかった昨年、今年行った障害者理解のための派遣授業を重症心身障害者(児)を守る会や 練馬聴覚障害者協会 手話対策部の手話講話など諸団体との連携を行った。今後も、幼児も保護者も障害を特別としないで共生社会と考える関係性ができる機会を構築していく。